

「はがき新聞」を活用した多文化共生へのアプローチ
－「やさしい日本語」による新聞記事の書き換えを通して－
Approach multicultural coexistence using “postcard newspapers”
－ Through rewriting newspaper articles using “Easy Japanese”－

福田浩三

Kozo FUKUDA

(兵庫県立伊川谷高等学校)

1. はじめに

総務省「住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数（令和6年1月1日現在）」¹⁾（2024）によると、日本における在留外国人は332万3374人であり、日本の人口1億2488万5175人のおよそ2.66%（38人に1人）となる。また、是川²⁾（2018）は2065年には「外国に由来する人口」が総人口の12.0%（8人に1人）になる見通しであると示している。これらのことから、日本における多文化共生^{※註1}社会の実現にむけた在留外国人とのコミュニティ作りや災害時・就学時など生活における言語面での支援の充実は急務であると筆者は考えた。

筆者は、これまでNIE実践を通して生徒に

- ・幅広い分野における興味、関心を高める
- ・情報の真偽を含めて整理し理解する
- ・効率よく効果的に情報を発信する

など、社会のグローバル化・情報化に必要なコミュニケーション能力を生徒が獲得することを目指してきた。その1つとして、近年在留外国人とのコミュニケーションに効果が期待される「やさしい日本語」をNIE実践に取り入れることで、生徒に対して多文化共生・国際理解への意識付けを試みた。

「やさしい日本語」とは日本語を母語としない外国人にも分かるように語彙や文法に配慮した日本語のことであり、1995年に発生した阪神・淡路大震災時に外国人への支援が十分に伝わらなかった経験から、その有用性が高まっている。庵³⁾（2013）は日本が多文化共生社会を迎えるにあたって、地域社会の共通言語として「やさしい日本

語」を挙げ、その重要性を示している。しかし、文化庁が2019年度に全国の16歳以上の男女個人に対して行った、「国語に関する世論調査」⁴⁾では、「やさしい日本語で外国人に対して伝える取組の存在を知っているか」の問いに対し、20代以下の年代は7割台後半が「知らない」と回答し、他の年代よりも高かった。このため、高校の授業において生徒が「やさしい日本語」を学ぶことは、多文化共生社会の実現に重要な役割を果たすと筆者は考えた。そこで、筆者が所属する兵庫県立伊川谷高等学校（以下本校と記す）のコミュニケーション類型^{※註2}に在籍する1年生（2023年当時）29名を対象に、学校設定科目「コミュニケーション基礎」において「やさしい日本語」について学習する講座を5回実施した。

「やさしい日本語」の学習に関しては出入国在留管理庁を中心に様々なガイドライン⁵⁾⁶⁾や教材例⁷⁾が示されている。しかし本研究実践では、生徒間で異なる文章内容を扱うだけでなく、その扱う文章内容について生徒が意欲関心を持って読み解くよう、生徒自らが新聞感想文の作成に選んだ新聞記事を教材として活用した。

「入門・やさしい日本語」認定講師が生徒に「やさしい日本語」の基礎知識を講義した後、「ワセダ式ハサミの法則」⁸⁾を活用して「やさしい日本語」

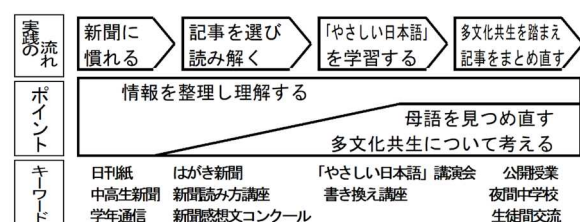


図1 研究の全体像

を用いて新聞記事をまとめ直した。この際、単なる文章の書き換えに留まらず、短作文として制約のある紙面に要点を表現するとともに、読み手を作ることで生徒に相手意識をもたせるため、A5サイズの「はがき新聞」^{※註3}を活用した。

本研究実践において、生徒は母語となる日本語を見つめ直すとともに、多文化共生社会におけるコミュニケーションの手段としての「やさしい日本語」の在り方について考えた。

本研究の全体像を図1に示す。

2. 研究の事前準備「新聞に慣れる」

本研究実践では新聞記事の活用が前提となる。活用する記事については、一般的に

- ・授業担当者が選び、生徒に提示する
- ・生徒自身が新聞紙面から選ぶ

などが考えられる。後者は生徒が新聞の一覧性・網羅性を踏まえた上で、複数の新聞記事から情報を読み解く必要がある。これを効果的に行うためには生徒が新聞を読むことに慣れていることが前提となるため、そのための期間も必要となるが、日常的なNIEの実践は日本新聞協会が2024年に実施した「NIE学習効果調査」⁹⁾においても生徒の学力向上に繋がる効果が示されている。

実践対象となる生徒が所属する本校1年生は、自宅で新聞を購読していない生徒が多数(2024年1月に1年生の生徒199名を対象に行った「自宅では新聞を購読していますか」の問いに対し、回答者191名中154名(80.6%)の生徒が「購読していない」と回答)であったため、本研究の事前準備として「生徒が新聞を読むことに慣れる」を目的に次のことを行った。

(1) 新聞日刊紙の設置

(2) 「朝日中高生新聞」の配布

(3) 「学年通信」の配布

(4) 「はがき新聞」の活用

(5) 新聞読み方講座の実施

(6) 新聞感想文コンクールへの応募

これらの詳細について、以下に示す。

(1) 新聞日刊紙の設置

本校はNIE実践指定校であるため、日刊紙6紙(朝日・読売・毎日・産経・日本経済・神戸)が各4ヶ月間無償提供される。この提供時期を3紙または6紙が同時期となるよう調整し、生徒昇降口に朝刊1面を並べて掲示(写真1)した。生徒は登校時に各紙1面の取り扱い記事の比較を行うなど、日常的な新聞紙面への意識付けを行った。



写真1 新聞6紙の1面の比

(2) 「朝日中高生新聞」の配布

生徒が新聞の紙面を実際に捲り、その一覧性や網羅性を体感する目的で、1年生の生徒全員に毎週、「朝日中高生新聞」を配布した。生徒が新聞紙面に目を通す時間を十分に確保するため、配布は「朝の読書の時間」(毎朝8:25~8:40に実施)を基本とした。配布に「朝日中高生新聞」を選んだ理由は、

- ・紙面レイアウトが日刊紙に近い
- ・紙面サイズが日刊紙の半分(タブロイド判)のため、教室の机上でも広げて読みやすい
- ・中学生・高校生対象の記事が充実している
- ・週刊であるため、週1回の配布において配布の継続性が保たれる

である。

(3) 「学年通信」の配布

生徒の新聞に対する興味関心を高めるため、日刊紙を模したデザインの「学年通信」(B4両面)を筆者が作成し、1年生の生徒全員に毎週配布した。その例を資料1に示す。掲載記事は生徒の日常、伝達事項、各種コラムなど生徒だけでなく保護者にも読みやすい内容とすることで、新聞配布に対する生徒の期待感の向上を図った。



資料1 週刊の「学年通信」(表・裏)

(4)「はがき新聞」の活用

生徒に新聞紙面のレイアウトや見出しの重要性を理解させる目的で、1年生の学校行事感想文などの制作に「はがき新聞」を活用した。完成作品を廊下に掲示することで、生徒同士が相互鑑賞を行い、はがきサイズの用紙に合う形での感想のまとめ方や見出しの付け方、効果的なイラストの活用法など様々な表現の工夫を共有した。

(5) 新聞読み方講座の実施

コミュニケーション類型1年生の生徒29名を対象に、外部講師による新聞読み方講座を3回実施した。新聞の持つ網羅性・一覧性・信頼性など新聞の持つ社会的役割や記事見出しの重要性について生徒が学ぶことで、以後新聞を読む際に役立てた。また、新聞記事から読み解く国際理解・SDGsについても考えた。さらに筆者が講師となり、1年生の生徒全員に日刊紙朝刊を配り、新聞における見出しの役割の重要性を伝える講座を1回実施した。その講座において生徒は、筆者が取材を受けた過去の記事を用いた見出し付け体験などを行った。

(6) 新聞感想文コンクールへの応募

コミュニケーション類型1年生の生徒29名を対象に、各自が読んだ新聞から最も興味・関心をもった記事を選び、その感想文を作成する課題を夏季休業中に課した。提出された感想文は授業担当である筆者が校内選考を行い、7つの作品を「第14回ひょうご新聞感想文コンクール」に応募した。

これは生徒にコンクール応募という目標を持たせることで、新聞感想文の作成における意欲向上を図ったものである。

この感想文作成に選んだ新聞記事は、生徒自身が自主的に選択したものであることから、生徒各自が興味関心を持つ内容であると筆者は考えた。そこで、後に行う「やさしい日本語」を用いた新聞記事の書き換えにおいても、これら生徒各自が自主的に選んだ新聞記事を教材に用いることにより、意欲的に取り組むことが可能になると考えた。

3.「やさしい日本語」新聞書き換え講座

コミュニケーション類型1年生の生徒29名を対象に、これからの社会のグローバル化を見据え、生徒が日常的に、日本語を母語としない他者の観点で日本語を捉えることを目的に、「やさしい日本語」を用いた新聞記事の書き換え講座を実施した。生徒が「ひょうご新聞感想文コンクール」応募のために選んだ新聞記事を書き換え対象とし、単に記事を「やさしい日本語」で書き直すのではなく、その要点を中心にA5サイズという限られた紙面の「はがき新聞」にまとめるという方法で行った。その具体的な手順を以下に示す。

(1)「やさしい日本語」講演会の実施

「やさしい日本語」の意義を生徒に伝えるため、「やさしい日本語」講演会を2023年9月5日に実施した。「入門・やさしい日本語」⁸⁾の著者である吉開氏が講師を務め、ワークを挟みながら、在留外国人とのコミュニケーションのみならず、日常会話における母語である日本語について生徒が考え直す機会とした。本講演会については、幅広く多数の生徒が「やさしい日本語」について理解を深める機会となるよう、1年生の生徒全員および3年生の生徒全員を対象とした。コミュニケーション類型の生徒29名は、以後5回続けて行われる「やさしい日本語」新聞書き換え講座の要点となる「やさしい日本語」誕生の社会的背景などの基礎知識を本講演会にて学んだ。

(2)「やさしい日本語」の演習実施

前述の「やさしい日本語」講演会を元に、コミュニケーション類型1年生の生徒29名を対象に、演習形式による「やさしい日本語」作成の講座を9月12日に実施した。講座は「入門・やさしい日本語」認定講師が担当し、「ワセダ式ハサミの法則」

(わ) けて言う (せ) いりして言う
(だ) いたんに言う (は) っきり言う
(さ) いごまで言う (み) じかく言う

と呼ばれる文の構造を簡単にする手法を用いた例文書き換えを中心とする実践的な演習を行った。用いた例文の例を資料2に示す。

例文：私は医者をしている兄がいます。

書き換え例の提示：私には兄がいます。
兄は医者をしています。

資料2 演習に用いた文例

(3) 新聞記事の書き換え作業

3回の授業(9月19日、26日、10月3日)を利用して、生徒が「やさしい日本語」を意識しながら自ら選んだ新聞記事をまとめ直した。この際、新聞記事のもつ情報を一定量保持した上で要点を新聞形式で伝えることを考慮してA5サイズの「はがき新聞」を用いた。作業は29名が5つの班に分かれ、班内で互いに分かりやすい表現や言葉

2023年〇月〇日(曜日)の様に
完成日時を記入(枠の上)

書き換え記事にタイトルを付ける
(元の新聞記事と同じでも、新たに
自分で付け直してもよい)

4桁の生徒番号 1〇〇〇
名前

縦書き、横書き問わず
やさしい日本語を意識して読
者により伝わるように記入。
レイアウト自由。図や絵が入
っても良い!色もOK。

2023年〇月〇日(曜日)の様に
完成日時を記入(枠の上)

書き換え記事にタイトルを付ける
(元の新聞記事と同じでも、新たに
自分で付け直してもよい)

4桁の生徒番号 1〇〇〇
名前

縦書き、横書き問わず
やさしい日本語を意識して読
者により伝わるように記入。
レイアウト自由。図や絵が入
っても良い!色もOK。

どの様なレイアウト・文
字・色等が「自分」を
伝えられるのか、意識し
ながら書いていこう!

やさしい日本語 新聞書き換え講座

マス目が小さいので、1マス1文字でなくて構いません。文字の大きさは自由。

完成日付以外は、青枠の外側には記入しない(印刷されないの)

本日を含め3回で完成です。スピード感も意識して。

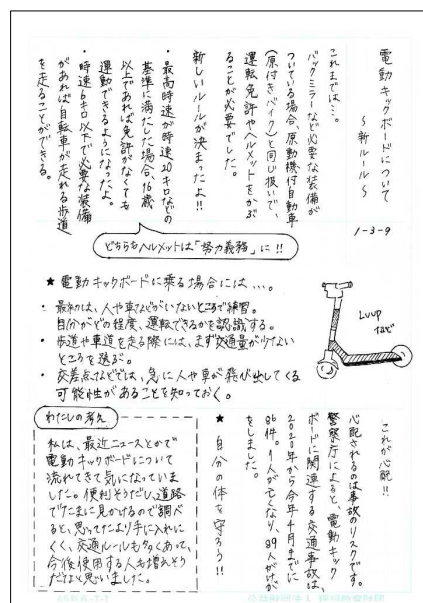
全体的に『濃く』書いて下さい。印刷時に綺麗に出ます。

資料3 生徒配布の記入指示プリント

を相談したり、タブレット端末を用いてより読み手に理解しやすい文言を調べるなどして行った。

「はがき新聞」への記入時の注意点については、生徒の自由な発想を阻害しないよう、資料3のようにタイトルや記名等の必要最小限に留めた。

まとめ直しにより作成された「はがき新聞」は、29名全員が互いに各々の作品を確認できるよう、スキャナーにて読み込みデータ化し、同サイズで印刷および冊子化して全員に配布した。生徒の作品例を資料4、元の新聞記事を資料5に示す。



資料4 生徒の作品例

16歳以上免許不要、ヘルメット努力義務

この秋の新学期から、電動キックボードに関するルールが新しくなりました。ものによっては自転車に近い扱いになり、10歳以上であれば、免許がなくても運転できる場合もあります。身近な交通手段となっていく電動キックボードの能力と、心がけたいことを専門家に聞きました。

車両区分	一般電動機付自転車 (原付50cc)	特定小型原動機付自転車 (原付50cc)	特別小型原動機付自転車 (原付50cc)
速度制限 (最高速度表示灯)	時速20km/h以下	時速20km/h以下	時速20km/h以下
運転免許	必要	必要	必要
ナンバープレート	必要	必要	必要
ヘルメット	着用	着用	着用
歩道	走行できない	走行できない	走行できない

電動キックボードの最高速度を規制に知らせる黄色のランプ(最高速度表示灯)が点灯すれば時速20km/h以下、点滅すれば時速20km/h以上です。

電動キックボードに乗る場合には、最初は人や車などがいないところで練習。自分だけの場所、運転できるかを試みる。歩道や車道を走る際には、必ず交通量が少なくなる場所を選ぶ。急に人や車が飛び出してくる可能性があることを知っておく(東洋大・都市環境学教授の取材から)。

自分の体を大切に。ヘルメットを着用し、安全運転を心がけよう。電動キックボードは、便利な移動手段ですが、安全に使うことが大切です。

資料5 資料4の元の新聞記事

（４）「はがき新聞」の発表

（兵庫県 NIE 推進協議会主催 公開授業）

本講座のまとめとして、生徒による「はがき新聞」の発表を 10 月 10 日に行った。

発表はまず、書き換え作業を行った 5 つの班ごとに班内で行った。生徒は先に渡された「はがき新聞」冊子の自作品ページを開き、

- ・記事を選んだ理由
- ・記事の書き換えで工夫や考慮した点

を中心に発表した。班内発表が終わると、班ごとに 1 名の代表者を選び、選ばれた代表者 5 名が全員の前で、プロジェクターにて拡大提示された自作品について発表した。

なお、この発表は兵庫県 NIE 推進協議会主催の公開授業として事前に新聞等で告知され、教員・教職課程大学院生・教育委員会・国際交流団体・出版社・新聞社関係を中心とする 33 名（オンライン参加者 9 名を含む）の外部一般参加があり、参加者は生徒の班内発表時は自由に教室内を移動・観察しながら発表を聴いた。

（５）夜間中学校との生徒間交流

新聞書き換え講座により多文化共生におけるコミュニケーションにおいて配慮すべきことを「やさしい日本語」の学習を通じて学んだ本校生徒 4 名が、在籍生徒の 8 割が外国籍である夜間中学校の神戸市立丸山中学校西野分校（以下、同校と記す）を 10 月 12 日に訪問し、「笑顔と会話あふれる楽しい時を過ごす」を目標に生徒間交流を行った。

交流内容は、同校の教員自作によるすごろくを両校の生徒が共に行うもので、交流の補助として同校教員も同席した。本校生徒 4 名は 3 つの班に分かれ、各々が「やさしい日本語」の学習で学んだ日本語を母語としない人とのコミュニケーションにおいて配慮すべきことを意識しながら同校の生徒・教員とのコミュニケーションを図った。当日の同校における具体的な交流手順を以下に示す。

〔交流手順〕

- ①本校生徒 4 名が同校教員から説明を受ける
- ②生徒 4 名が 3 つの班に分かれる

③ 1 つの班につき 1 つの教室を割り当て、同校の生徒および教員が数名付き、1 つのテーブルを囲む

③班内で順に自己紹介をする

④全員ですごろくをする

〔同校教員から本校生徒への注意点〕

- ・同校生徒はすごろくを知らないため、本校生徒が始めにすごろくのルールを説明する。
- ・すごろくのコマの停まった番号ごとに課せられる質問内容は、本校生徒が同校生徒に説明する。
- ・同校生徒が答えた後、本校生徒は「私もそうなんですよ」などコメントを一言付け加える。
- ・その場で質問内容に対する説明を考えるのは大変であるため、あらかじめ「やさしい日本語」を用いて考えておくといよい。口頭での説明以外に、ゼスチャーやスマートフォンの映像、紙に絵を描く等を利用してもよい。
- ・どうしても説明しきれない場合は、班に同席している同校教員に助けを求めてよい。
- ・じゃんけんやサイコロの使い方について説明が必要かもしれない。

本校生徒は同校生徒との交流前、緊張と不安感を口にしていたが、同校教員から「失敗してもよいので自分から進んで話を」とのアドバイスを受け、交流に挑んだ。実際、交流に参加した同校生徒は、大半が簡単な日本語を理解した。しかし、知らない単語が出てきた場合は、本校生徒が身振り手振りや身近なたとえを使い説明した。交流は 40 分間であったが、交流後に本校生徒は満足感を述べていた。交流の様子を写真 2 に示す。



写真 2 夜間中学校との交流の様子

4 考察

ここでは、本研究実践時の生徒感想文や生徒の様子、公開授業時に外部参加者で行った研究協議会で得られた講評や後日寄せられた感想、生徒の学びについての調査を元に考察を行う。

(1) 研究の事前準備について

研究の事前準備「新聞に慣れる」における実践は、生徒が新聞を身近な読み物として捉え、慣れることに重点を置いた。これらの実践が生徒へ与えた効果検証として、6月20日に実施した3回目の「新聞読み方講座」における生徒感想文(回収26名より4名分、原文ママ)を以下に示す。

[生徒A] 私は新聞は難しくて面白くないものだと勝手に決めつけていたけれども、この類型に入って講座をうけた事をきっかけに新聞を読んでもみると、とても面白くて、読みやすくて、衝撃を受けました。新聞にはたくさんの工夫がされていたり、急に記事？ネタが入ってきた時の対処法など、色々な事を聞けて、とても面白かったです。

[生徒B] 新聞って正直あまり読むこともなく、興味が少なかったのですが、今日新聞についてくわしく知り、興味がわきました。新聞をよむ時、見出しや文字の並び、写真の配置とか気にせずによんでいました。だけど配置や、かきかたの良い例、悪い例をみくらべて、こんなにもこまかい工夫がされていたと知り、感銘を受けました。

[生徒C] 新聞は記事の内容の量、見出しの配置や文字の大きさなどで様々な工夫ができるものなんだということが分かりました。新聞の記事の内容で「5W1H」ということを初めて知り、今度から意識して読もうと思いました。写真の撮り方も三角を意識すると印象が良くなったのですごくかったです。

[生徒D] 私は、色々な情報を新聞ではなく、テレビやスマートフォンから手に入れているので、新聞の見方など全然知らなかったのですが、今日、新聞について色々聞けて良かったです。新聞は

全部読む必要はなく、見出しを見るとだいたいどんな話か分かると教えてもらい、今までは全部見ようとしていましたが、教えてもらった方法で新聞を読むととても見やすくて、内容がスラスラと入ってきました。これからもこの方法で新聞を読もうと思います。

回収した生徒感想文全般からは、日常的に生徒が新聞を読む機会が少ないこと、新聞に対する「難しい」という印象が定着していることが読み取れた。生徒が新聞を読む場合、事前に新聞の読み方を教授することが、効率の良い新聞記事の読み解きに繋がるとともに、記事内容の要点を踏まえたまとめ直しを可能にすると考える。

「生徒が新聞に慣れる」ための事前準備は、研究の本題となる「やさしい日本語」を用いた新聞書き換え講座が、単なる新聞記事の書き換え作業にならないために必要な過程であったと考える。

(2) 新聞書き換え講座時の生徒の様子より

生徒が個々に選んだ新聞記事を「やさしい日本語」の学習に用いたことで、生徒ごとに扱う題材が異なることとなり、それが生徒間における班内での積極的な対話に繋がったと考える。また、A5サイズという限られた紙面の制約により、記事の文章を単に言い換えることはできず、生徒は記事を読み込み、記事に書かれていない背景部分を調べるなど、その内容把握に務めながらまとめ直すこととなった。さらに記事を「はがき新聞」にまとめ直すことで、本文をまとめ直すだけでなく、より読み手に伝わる見出しや本文の表現、紙面レイアウトやイラスト等の活用について考えた。

本研究実践では参加生徒全員が、他者の選んだ新聞記事を読み込んだ上で、その記事に対し制作された「はがき新聞」を見ることで、

①文章のまとめ方

②「やさしい日本語」による書き換え方

③「はがき新聞」紙面への表現法

など、より深い学習効果が期待できる。しかし限られた時間においても、班単位での書き換え作業や発表により、生徒間での意見交換の活性化など

前述の学びの多くが補完されていたことが、生徒の様子や感想、公開授業参加者の感想より確認できた。

（３）公開授業後の研究協議会参加者より

公開授業として行った、生徒によるはがき新聞の発表授業終了後、筆者と外部参加者による研究協議会が行われ、外部参加者から本講座全体を通して、以下の講評を得た。

- ・元となる新聞記事の十分な内容の理解をさせる
- ・自分の言葉で的確にまとめる
- ・代表作品選定の評価基準を明確にする
- ・発表の方法や内容の改善が必要

さらに後日、この公開授業参加者から兵庫県NIE推進協議会に寄せられた公開授業の感想を以下に示す。（感想はすべて一部抜粋である。）

〔夜間中学校 A教諭〕「A5用紙の大きさと新聞を書く」。この発想に驚きました。この大きさと書いたことにより、新聞を書くというよりも友達にニュースを届けるような感覚で書けたことが、自由な発想と構想につながったような気がしました。

〔中学校 B教諭〕「やさしい日本語」講座講演会を行い、母語である日本語について考えなおし、実際に自分が気になる新聞記事を「やさしい日本語」に置き換えたはがき新聞を作っていた。どの作品も相手がわかりやすいように文字を大きくしたり、絵を挿入したりと工夫がされていた。また、新聞記事の要約だけでなく、その記事について自分がどう思うかも書かれており、班や全体で意見を交流するときに自分の意見を発表することで、互いの価値観を理解できる授業だった。

〔新聞社 C支局長〕少し残念だったのは、記事が伝えたいポイントに触れずに書き換えていたものがあったこと。「高校1年生にそれを求めるのは少しハードルが高いかな...」と思った後、「むしろポイントがわかりやすいように、我々記者が努力しなければ...」と思い直した。

〔D県 NIE 推進協議会事務局長〕「やさしい日本

語」への記事書き換えを通して、「相手に伝わるように伝える」ことに真摯に向き合う生徒たちの姿が印象的でした。記事を書き換えるためには、元の記事を読み込み理解し、ポイントを絞り、わかりやすい言葉に置き換えるなどたくさん工夫が必要で、有効な言葉のトレーニングになると思います。また、読み手を想像しながら表現することは、生徒の視野の広がりにつながると感じました。

これらの講評や感想は、いずれも生徒が伝えたい内容（ここでは新聞記事の内容）をどのようにA5サイズ用の紙に表現すればより相手に伝わるかについて触れられている。このことから、本実践により生徒は多文化共生社会におけるコミュニケーションの在り方についての学びを得たと考える。前述するD県NIE推進協議会事務局長の感想が特に、筆者が本実践を行う意義についての的確に捉えていると感じた。

（４）生徒の学びについての調査

5回にわたる「やさしい日本語」を用いた「はがき新聞」への書き換え講座を終了した後、生徒の学びについて調査した。調査は「コミュニケーション基礎」において、授業終了時に提出を課している日報（授業におけるメモや感想を記入するワークシート）の中に質問項目を設けることで行った。

なお、ワークシートによる調査を実施した10月31日は新型コロナの流行期と重なり、調査対象の生徒29名に対し、欠席11名であったため、回答者数は18名（62%）である。

5つの質問項目について、主だった回答をあげるとともに、その内容を考察する。なお、回答については主な回答を一部抜粋した。（文意を変えないために誤字脱字も含め原文ママ）

質問1 元記事の中であなたが伝えたかったこと

回答

- ・文字が、小さかったり、多かったりすると「読みにくい」と感じて読む気がなくなってしまう

たので、文字を大きく、少なくして、見やすい新聞を意識しました。

多くの回答が、生徒自身の選んだ記事の内容を伝えなかったこととして記載していたが、上記のように、「はがき新聞」をまとめる際に自らの体験を元に考えた表現法について記載しているものがあった。これは本実践における「体験から学んだ要素」について触れられた重要な回答であった。

質問2 上記のことは制作した「はがき新聞」で十分に伝えられると思いますか（理由も含め）

回答	1 充分伝えられる	2 名 (11%)
	2 ある程度伝えられる	13 名 (72%)
	3 あまり伝えられない	3 名 (17%)
	4 伝えられない	0 名 (0%)

その理由

「1 充分伝えられる」の回答より

- ・難しいところをはぶき、端的に分かりやすく伝えられるから。

「2 ある程度伝えられる」の回答より

- ・やさしい日本語だけじゃ、やっぱり伝えるのは難しく、完全には伝えることができないなと感じます。でも、ある程度は小さい子や外国人の方でも伝わる日本語なのじゃないかと思います。
- ・文章はたくさん書けたけれど、イラストやふりがなが、あまりかけなかったから。
- ・やさしい日本語にかえようとする、けずらないといけなくなる部分もあったので情報が少なくなって具体的には伝えられない。
- ・分かりやすくは伝えられないかなと思いました。だけど、図にまとめてみたので元記事よりは、字も少なく、大きくしたので読みやすくなったと思いました。

「3 あまり伝えられない」の回答より

- ・まとめ方がむずくて、分かりづらいから。
- ・文字を大きくしたり、やさしい日本語にすることを意識したけど、ふりがなをふったりすることができなかった。

回答内容より、元となる新聞記事のもつ情報を一部または大幅に削らなければならないことに多くの生徒は抵抗感を感じていることが読み取れる。しかし、文章の冗長性を極力省き、伝えたい内容を簡潔にまとめることは「やさしい日本語」作成においても基本的な注意点であることから、本実践で紙面サイズに制約のある「はがき新聞」を用いた書き換え実践経験は、「伝えること」の優先順位づけや無駄を省いた表現の良き練習になったと筆者は考える。

質問3 やさしい日本語の活用場面について考えられるものをあげなさい（班内意見交換）

回答

- ・外国人や小さな子どもと話すとき
- ・高齢者と話をするとき。
- ・人に何かを伝えるとき。
- ・文章をわかりやすくしたいとき

回答より、生徒は他者とのコミュニケーションにおいては、相手の状況を考えながら相手がどのような受け取り方をするかまで考えて発信をすることが必要であることを学習したと推察する。夜間中学校との生徒間交流に参加した4人の生徒の様子を観察すると、実際に身振り手振りに加えて「やさしい日本語」を意識した言葉でコミュニケーションを行っていた。

質問4 やさしい日本語書き換え講座を通して学んだこと

回答

- ・小さい子供とか外国人には、だいたいゆっくり話してあげれば伝わるものだと思っていたけど、ゆっくり話すだけではダメだということが分かった。
- ・日本語をすこしやさしくするだけで、外国人の日本に対する印象がかわっていくことができるんだと学べることができました。
- ・日本人同士だと、言葉が足りなかったり、だらだら話しても伝わるから問題なかったけど、外国の人からしたら本当にわかりづらい話

し方だっただろうなと思いました。

- ・やさしい日本語のはがきを皆の分見た時に、全く知らないニュースや記事でもとても分かりやすかったです。やさしい日本語はとても便利だなと思いました。
- ・やさしい日本語は、普段使っている日本語とは別物で伝えるのが難しくなってしまうけど、誰にでも伝えられるコミュニケーションは身につけておくべきだなと学びました。

日本人同士では、送り手の言葉が不足している部分を受け手が補完をしているという点に生徒が気づいたことは重要である。しかし、その補完部分が送り手の意と異なっている場合もあり、これがコミュニケーションの齟齬に繋がることにまで理解が深まるような指導が必要と考える。回答全般より、本研究実践は生徒が母語であるがゆえに、日常は意識せずに用いている「日本語」について見つめ直す場となっていたことが分かる。

質問5 新聞・多文化共生・やさしい日本語について、あなたの意見・感想を書いてください

回答

- ・新聞は同じことをとりあげていても、レイアウト、見だし、伝え方によって伝わり方が大きく違ってくるのだなと思いました。
- ・国によって感じ方や考え方がちがうから、お互いに認め合えるようになりたいと思った。
- ・よく家族で話をすることが多いけど、あまり伝わってなく誤解が生まれることがありました。なのでやさしい日本語で学んだことで誤解が減りより伝わりました。なのでこれからも使っていきたいと思います。
- ・私達が普段伝えようとしていることって、案外他人に上手く伝わらないんだなと思いました。なので、しっかり「伝える」という意思を持ち、いかに正しく伝えるかを大事にして会話しようと感じました。そうすることで、人とのトラブル等も防げるのではないかな、と思います。

本研究実践を通して、生徒は他者とのコミュニケーションにおいて、送り手の真意が受け手に伝わらない場合があることも理解した上で、送り手が伝え方を工夫することが相互理解に繋がり、この考えが多文化共生社会において必要であることを学んだのではないかと筆者は考える。

5. 全体のまとめと今後の展望

本研究で生徒は、新聞と「やさしい日本語」を活用した実践により「新聞から情報を得る」「伝えるべき情報を取捨選択しまとめる」「多文化共生について考える」について学習した。

事前準備として行った「新聞に慣れる」の一環としての「朝日中高生新聞」の配布は、2年目も半ばとなった2024年11月現在も毎週継続している。この期間、新聞紙面を捲り記事に目を通す生徒が当初より増えていることが観察により認められる。この実践は日本新聞協会が定義しているNIEタイム¹⁰⁾と捉えることができる。NIE学習効果調査（日本新聞協会NIE委員会が2024年1～2月に実施）の結果概要¹¹⁾では、生徒の「聞く力・話す力」「読む力」「書く力」「理解力・考えを深める力」「主体性」と紙のNIEタイムとの相関関係が示されており、今後の本校生徒のこれらの力の伸びが期待できる。

これら事前準備のうち「中高生新聞の配布」「学年通信の配布」「はがき新聞の活用」については、対象生徒が所属する学年において卒業までの3年間、継続して実施する予定である。

母語の異なる人同士の交流における「言葉の壁」自体はAI翻訳機等の普及により、日を追うごとに低くなっている。しかし、南海トラフ地震の危険性が叫ばれている中、30年前の阪神・淡路大震災で問題化した外国人への支援の在り方を念頭に、必要な情報を「やさしい日本語」で簡潔にまとめて発信する試みを地元高校生が学ぶことは、震災の教訓を継承する意味でも意義があったと筆者は考える。

「やさしい日本語」を用いた新聞記事書き換え実践の公開授業参加者や、兵庫県NIE推進協議会へ提出した研究報告に目を通した教員から、「やさ

しい日本語」を生徒が学ぶ重要性を感じる声上がり、筆者が世話人となり「新聞をつかった『やさしい日本語』研究会」を2024年8月1日に設立した。その内容は、

- ・「やさしい日本語」に関する学習会の実施
- ・新聞記事の書き換え講座の公開
- ・新聞をつかった「やさしい日本語」活用法の開発

であり、本稿執筆時点の会員は筆者以外では小学校・大学の教員、多文化共生マネージャー等である。現在の活動は「やさしい日本語」を活用した授業実践に興味を持つ教育関係者や新聞関係者とともに2ヶ月に1度の学習会を実施するに留まっている。しかし、兵庫県では2023年に新たな夜間中学校が開校するなど、異なる価値観をもった多様な生徒が集う学びの場が増えつつあるため、本研究会では今後、本研究実践における「やさしい日本語」を用いた学習法を再構築し、このような学びの場において異なる校種を交えて実践および効果検証を行う予定である。

謝辞

本研究では、「やさしい日本語」の指導に尽力いただいた「入門・やさしい日本語」認定講師の塩川雅美先生、ならびに生徒間交流の実現に協力いただいた神戸市立丸山中学校西野分校の教職員と生徒の方々に深く感謝を申し上げます。

※註1

総務省「多文化共生の推進に関する研究会報告書」(2006)では、地域における多文化共生を「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」と定義している。

※註2

本校が「地域や国際社会において、コミュニケーション能力の伸長をはかりながら、主体的に活躍できるリーダーとなる人材を育てる」ために設置した類型である。2月の特色選抜入学検査にて合格した生徒がこれに該当する。1年次にコミュ

ニケーション能力の向上を目的とした学校設定科目「コミュニケーション基礎」(1単位)を実施する。

※註3

本稿では「はがき新聞」を、「はがきの大きさととられず、決められたサイズの用紙に相手意識を持った『新聞』として書くという取組み」と定義する。

参考文献

- 1) 総務省『住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数 (令和6年1月1日現在)』, 2024年8月
- 2) 是川夕「日本における国際人口移動転換とその中長期的展望—日本特殊論を超えて」『移民政策研究』, Vol. 10, pp. 13-28, 2018
- 3) 庵功雄『『やさしい日本語』研究の現状と今後の課題』『一橋日本語教育研究』2号, pp. 1-12, 2013
- 4) 文化庁『令和元年度「国語に関する世論調査」の結果の概要』, 2020年9月
- 5) 文化庁『在留支援のためのやさしい日本語ガイドライン』出入国在留管理庁, 2020年8月
- 6) 出入国在留管理庁, 文化庁「話し言葉のやさしい日本語の活用促進に関する会議『在留支援のためのやさしい日本語ガイドライン別冊やさしい日本語の研修のための手引』」, 2023年3月
- 7) 出入国在留管理庁『やさしい日本語研修教材例』, 2024年3月
- 8) 吉開章『入門・やさしい日本語』アスク出版, 2020
- 9) 教育に新聞を「NIEに関する調査」日本新聞協会, 2024年1~2月,
<https://nie.jp/research/> (2024年11月21日最終確認)
- 10) NIE タイム <https://nie.jp/nietime/> (2024年11月21日最終確認)
- 11) NIE 学習効果調査結果概要(2024年1~2月)
<https://nie.jp/research/survey/> (2024年11月21日最終確認)